

する神々のお恵みによるもの。

66 周りの人たちが（私のことを）憶測で何を取りざたしようが、自然の成り行きに任せるほかはない。

67 悲しくて苦しい毎日を嘆いている間に温陽な春をやり過ごしていた。

68 私の暗い心をよそに、穏やかに晴れた初夏、日の光に明るく新緑も映えて世の中も治まっっていて、おだやかな日々。

69 この土地の風俗、風習には当然ながら次第になじむようにしたいし、

70 それぞれの習慣にもしきたりのままに従いたいと思っている。

71 （ところが、この太宰の地といったら京との余りの違いに驚くばかりで、例えば）この土地の塩が苦味強いのは、ただ木か炭で海水を炊くだけの塩だからだ。（京辺りの藻塩は風味があった）。

72 （一方周りには）あくどい取引で手に入れた布を、高く売りつけて儲けている商人たちが（うようよ）いる。

### 語釈

65○春齏：日常の食品をいい、「春」は臼で引いた磨り粉。「齏」は野菜を切つて醬類・シウウガ・ネギ・ニラなどで和えたナマスの類。ここでは道真の太宰府官舎での、日々の質素な食事をさす語と考えられる。刊本を始め、写本の幾つかは、「齏」<sup>しゅう</sup>「春齏」<sup>しゅうさん</sup>としているものがある。「齏」は「物惜しみすること」、「齏」は「穀物をかまどで煮炊きすること」「飯をたくこと」の意がある。この句の四字目「造」の韻は仄韻である。二四不同の原則から行けば、二字目は平韻となるべきところである。「齏」は仄韻で、「齏」は平韻である。したがって「齏」は採らず、「齏」で解釈した。